

巨大ジャングルジム ～「学びの場」と「遊びの場」～

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1180054 川島 みなみ

指導教員 吉田 晋

1. はじめに

少子化の影響により小学校が次々と閉校していき、友達の家も遠い、公園がない山間部において、小学校は友達と交流が持てる場である。閉校したことにより、スクールバスを使って色々な地域から、子供たちは毎日、小学校に通う。そんな山間部の小さな小学校について考えたいと思う。

2. 対象敷地

対象敷地は、徳島県の西部、三好市山城町大川持に位置する「三好市立山城小学校」とする。(図1)

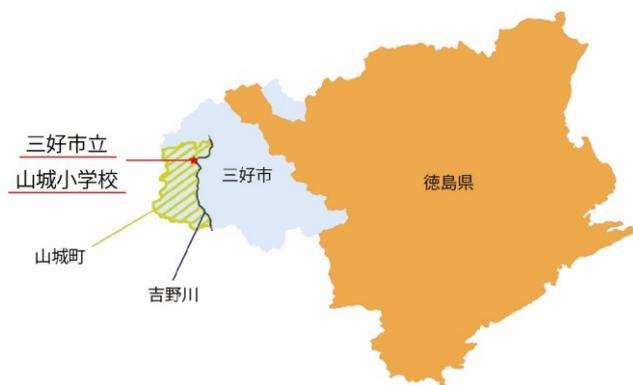


図1 対象敷地の位置

北、南、西は山に囲まれ、国道を挟むと吉野川が流れており、自然豊かな土地であると言えるだろう。同じ校舎内には山城幼稚園、同じ敷地内には体育館、プール、山城放課後児童クラブがある。運動場は斜めに50mを取れるほどで、比較的狭い。(図2-1)

校舎は山の斜面に沿い、標高約155mの三段に分かれた土地に建設されている。ほとんどの児童は市道から階段を上がり登校する。(図2-3) また、三段になった敷地に沿うように階段が続いている。平成4年に建てられたこの校舎は大きく3棟に分かれており、東側から木造二階建て、鉄筋コンクリート造5階建て、鉄筋コンクリート造(一階)と木造(二階)の二階建てといったように並ぶ。現在の全校児童は66人であるが、児童の減少により、俗にいう「校舎の床が余っている」状態である。



図2-1 配置図



図2-2 運動場から見た校舎



図2-3 屋外階段が市道まで続く様子



図2-4 東棟・児童玄関



図2-5 小学校西棟と山城幼稚園

3. 設計

「小学校」は子供たちにとって、初めての「社会の場」と言えるだろう。小学生にとって小学校が「学びの場」であることは、もちろん重要である。しかし勉強以外の様々なことを遊びから学ぶ、「遊びの場」としても非常に重要であると考え。床が余る小学校と、遠方から通う児童が遊ぶ場、新たな児童の遊び場となる空間づくりを行う。

3-1. 学びの場

現況では、各教室が閉鎖的空間であるように感じられ、普通教室や特別教室の位置関係がバラバラに配置されていたことから、普通教室は児童玄関に近い東棟に配置し、中央に吹き抜けを設けた。特別教室は中央棟を挟み、西棟にまとめて配置した。

5-2. 遊びの場

遊びの場は中央棟に配置した。いわゆる「階層」の概念を無くし、「走り回れる校舎」のイメージをベースに、階段や床などを配置した。(図4) 以下に大きく3つの空間を紹介する。

① 太陽のウェルホール

開放感を味わえる大きな吹き抜け空間。ガラス張りの壁から太陽の光をたくさん取り込む。

② ブックストラベル

いわゆる図書室としては、室を設けずに、本を読む空間を設けた。本棚は椅子と一体化している。自由に本の世界を旅する。

③ 宙箱 (ソラバコ)

箱型の三つの部屋を浮かんで見えるように配置し、宙に浮かんだ箱として、宙箱 (ソラバコ) と名付けた。う

ち一つは天井高を 1200mm とし、身長の高い低学年の児童のみが入れる空間としている。

6. まとめ

本設計でメインとして扱った中央の建築物の骨組みが大きなジャングルジムに見えることから、「巨大ジャングルジム」と名付けた。子供たちには私たち大人には思いつきもしないような遊び方で、それぞれの時間を有意義に過ごしてほしいと思う。校舎の余った床を使って、コストを抑えつつ、山間部ならではの問題を解決できたのではないだろうか。

7. 参考文献

三好市立山城小学校ホームページ (2018年2月1日取得) <http://www.miyoshi.ed.jp/yamashiro/>

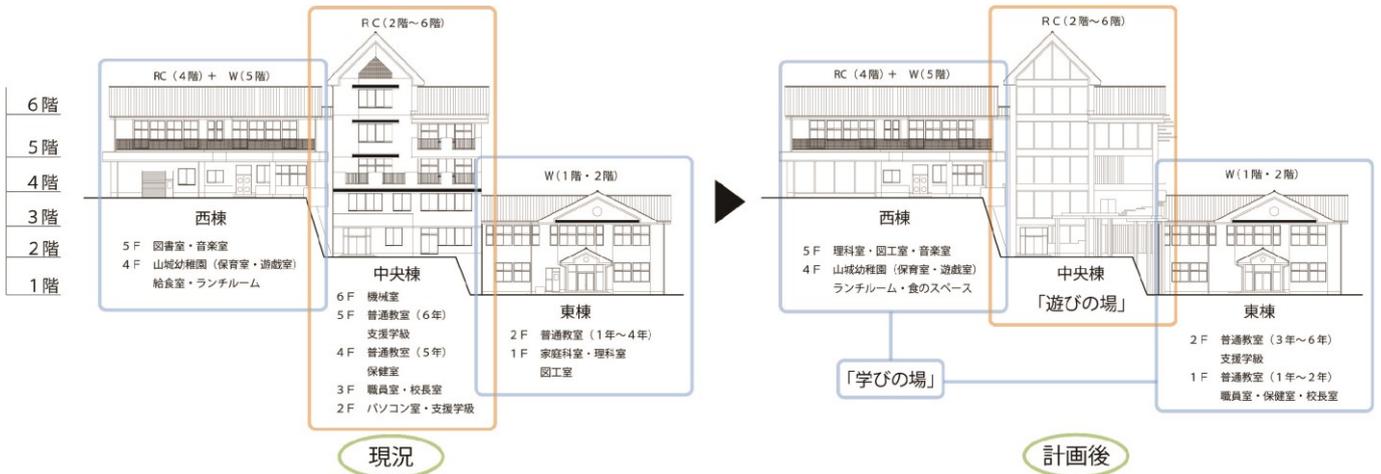


図3 立面図の比較

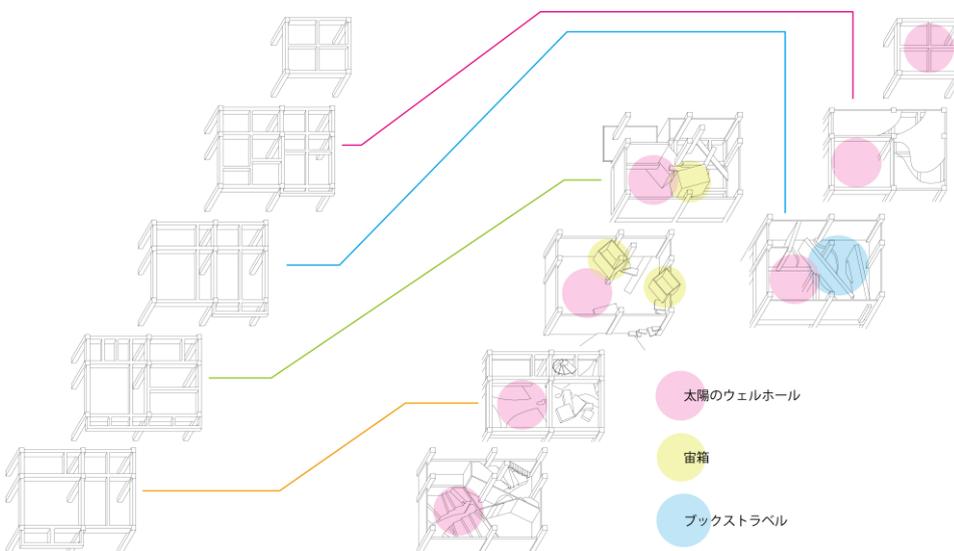


図4

アクソノメトリック図の比較